

都市高齢者と社会参加活動

——高齢者のふれあい・いきいきサロンを中心に

キーワード：都市，高齢者，地域，生きがい，ふれあい・いきいきサロン

人間共生システム専攻 共生社会学コース

玲 玲

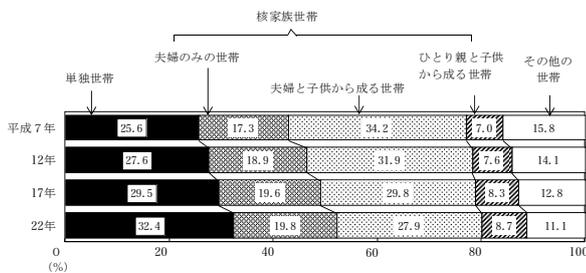
問題設定

日本は 2010 年平均寿命が世界トップになったにもかかわらず、高齢者に関するマイナスイメージが依然としてつきまとい、現状、高齢者が社会参加活動に参加するための社会環境は十分に整備されているとはいえない。社会参加の意欲が高い高齢者が多数いるものの、社会が適切な対応ができず、結局高齢者が家でひきこもりがちになる案件が多く存在する。また、高齢者のひきこもり現象が、高齢者の病気、孤独死に繋がっていると論じられている。本論は、高齢者の身近にある地域社会を中心に住民同士のつながりを構築する上で、他者や、社会とのつながりを保ち、展開しながら社会参加を行う上で受け皿になっているサロンを基に、高齢社会に生きる高齢者像、高齢者とともに生きる社会環境のありかたを検討する。

1 社会状況

平成 22 年の国勢調査によると、日本の人口は 1 億 2805 万 7352 人になっている。65 歳以上の高齢者人口は増加し、総人口に占める割合は 20.2%から 23.0%に上昇し、15 歳から 64 歳人口は 3.6%低下、割合は 66.1%から 63.8%に低下し、15 歳未満人口は 4.1%減、割合は 13.8%から 13.2%に低下した。家族構造を見ると図 1 のように、世帯の種類・家族類型を見ると、「単独世帯」が「夫婦と子供から成る世帯」を上回り、最も多い家族類型である（国勢調査 2010）。

図 V-3-1 一般世帯の家族類型の割合の推移—全国（平成 7 年～22 年）



(注) 平成 7 年から 17 年までの数値は、新分類区分による過及集計結果による。

図 1 日本の家族変化

出典：（総務省統計局，2010）より

また、本論文の調査フィールドである福岡市の家族構造の状況は図 2 のようになっている。福岡市における単独世帯の変化に対し社協の危機感が高い。

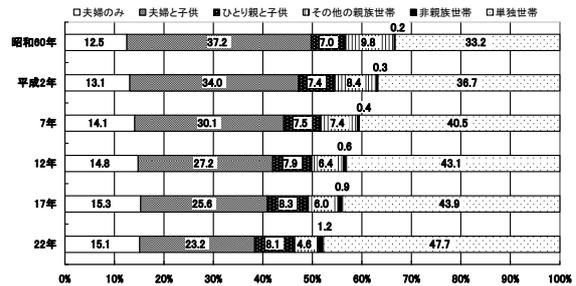


図 2 福岡市の家族構造の変化

出典：（総務省統計局，2010）より

平成 21 年度の市政に関する意識調査の結果¹によると住民の地域での助け合い、支え合い活動への参加は図 3 のようになっていた。この調査自体は高齢者に特定したのではなく、福岡市全体住民を対象にしているが、「参加している」と「たまに参加している」と答えた割合を合わせても全体の 31%しか占めていないことがわかる。

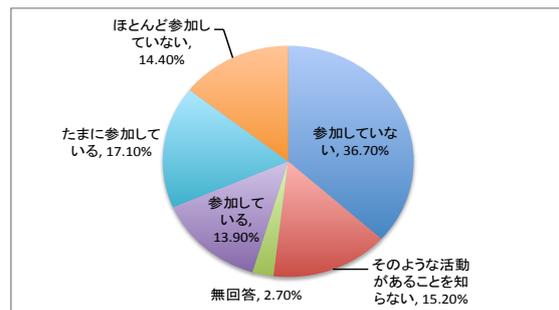


図 3 地域での助け合い、支え合い活動への参加（地域福祉）

出典：（福岡市社会福祉協議会 2012）を基に作成

また、同調査²で福岡市の住民同士の近所付き合いに関する

¹ 福岡市役所市長室広聴課が調査主体となり、平成 21 年 8 月 19 日から 9 月 1 日までの間、福岡市全域で、福岡市内に居住する満 20 歳以上の男女 4500 人を抽出し、郵送で行った調査である。そして、2633 サンプルが回収され、回収率 58.5%だった。

²平成 21 年福岡市役所市長室広聴課が調査主体となった市政に関する意識調査のことである。

調査で把握した「ほとんど付き合いはない」の割合は15.9%で、決して低くはない数値と考えられる。

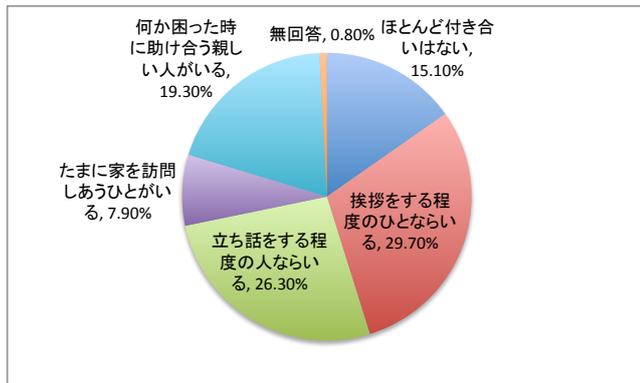


図4 福岡市の住民の近所付き合い程度
出典：(福岡市社会福祉協議会 2012) を基に作成

日本は上述のような社会背景に置かれ、労働人口の不足、若い世帯の負担増加など様々な課題に直面している。そのため、元気で社会参加意欲の高い高齢者が社会の担い手として期待されるようになった。高齢者自身も参加意欲が高く、制度も整備され始めているが、環境はまだ十分整備されているとは言えない状況にある。

環境を高齢者の身近な所で構築し、かつ地域住民同士の近所付き合い、見守りの活発化を図るねらいで社会福祉協議会が高齢者のサロンを展開している。

本論文は福岡で行われているサロンを二ヶ所取り上げ、サロンの実態と高齢者のサロン参加の実態を紹介し、さらに、サロンの役割や、サロン参加と高齢者の生きがいとの関連を検討するものである。

2 先行研究の整理

高齢者の老いを巡って行われてきた諸理論の背景を述べ、サクセスフル・エイジングの重要性についても論じた。従来の「プロダクティブ・エイジング」という概念は高齢者の経済的活動への参加に関心が偏り、高齢者に就業を強制することになりかねないことの懸念や、精神的・内面的な活動の重要性を軽視しているという批判を受けたため、社会学の領域で「アクティブ・エイジング」の視点が登場したという(前田 2006)。しかし、この発想も後に「活動」と「健康」に注目が行き過ぎ、加齢に伴い身体的に衰えて行く高齢者には適切ではないと批判された。

高齢者はどのようにすれば、幸福に老いることができるのかということが1960年代以降、離脱理論と活動理論の間で論争が起こるなど、長く研究されてきた。その後、高齢者が幸福に老いることを目標とする「サクセスフル・エイジング」

が注目を集め、高齢者の生きがいとはどのようなものかを問われるようになった。本論文で鈴木(1986)の研究を挙げ、サクセスフル・エイジングを達成するために必要な生きがいや幸福感は「平凡なもの」である事を受け、正常人口の正常な生きがいを研究の対象にすることとした。また、都市の高齢者の社会参加を中心に調査した金子の研究(1993)から、福岡市の高齢者の社会参加活動がアソシエーション型で、「スポーツ」、「趣味・娯楽」などを中心に行っている活動が多いことが判明した。

高齢者の社会参加という行為の中でも、高齢者の身近な所で行われているサロン活動に注目した高野らの研究(2007)では、高野らは山口県で行っている高齢者のサロンを「福祉サービスの場」、「住民参加の場」、「福祉教育の場」という三つの観点から研究することで、サロンの参加者に対する効果と抱えている課題を明確にしている。本論文ではサロンの役割(機能)を検討する際、高野の議論(2007:133)に依拠する。

3 高齢者による社会参加活動の実態

福岡市のサロンは136校区に約300ヶ所で開催されている。しかし、サロンの活動頻度については、年に12回(月1回)開催しているサロンは190ヶ所で最も多く、年に24回(月に2回)のサロンが70ヶ所で続き、年に36回(月に3回)が20ヶ所、年に48回(月に4回)18ヶ所と様々である。

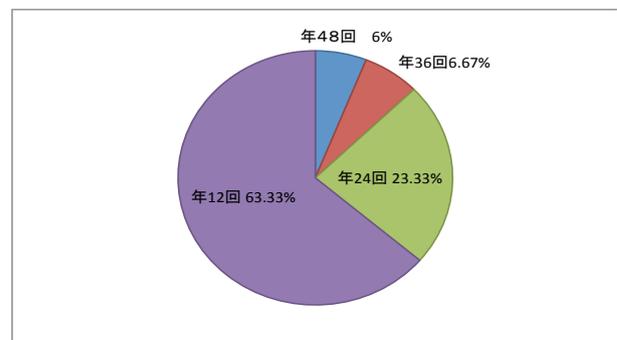


図5 福岡市のサロンと開催頻度
出典：(福岡市社会福祉協議会 2012) を基に作成

福岡市社協によると、サロンの活動は「いきいき体操、レクリエーション、お手玉」、「健康チェック、血圧測定、茶話会」、「ゲーム、美化活動、会食会」、「生き生き講座、演芸会、グランドゴルフ」、「ダーツ、本の読み聞かせ、伝承遊び、ボール遊び、ストレッチ」、「歌、踊り、お誕生日会」、「季節の行事、お花見、音楽会」、「カラオケ、頭の体操」など様々ある。しかしながら、活動は高齢者の体調管理・健康や趣味・娯楽に集中していることがわかる。

次に開催する地域の単位について見ると、町内会単位で開

催しているサロンが非常に多いことがわかる。

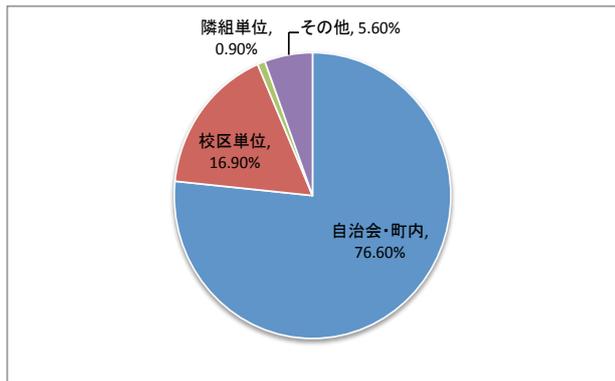


図6 サロンの開催単位

出典：(福岡市社会福祉協議会 2012) を基に作成

本論では、サロン二か所の担い手と参加者にそれぞれ、聞き取り調査を一回ずつ、(担い手:調査1、参加者:調査2)実施した。

調査1の概要

二か所のサロンの担い手4人を中心に、平成24年10月から12月にかけて聞き取り調査を行い、地域住民のつながり、サロンの開催された経緯、サロンを実施する上での困難、サロンの参加者に対する効果等を中心に聞き取った。調査2は、サロンの参加者に対し、主に、参加者の自分の住んでいる地域に対する感想、サロンに参加した経緯、サロン参加の効果、また、サロン参加は参加者の生きがいになっているかどうかを聞き取った。

表1 美野島カラオケサロンの基礎情報

開催頻度	月1回
開催曜日	毎月の第四月曜日
開催時間	午前10時～12時
参加者人数	22人前後
ボランティア数	3～5人
会費	無し
サロン内容	カラオケ、茶話会
社協との関連	助成金をもらっている

表2 城浜団地よかよかサロンの基礎情報

開催頻度	月1回
開催曜日	毎月第二金曜日
開催時間	午後14時～16時
参加者人数	12人前後
ボランティア数	13～16人
会費	無し
サロン内容	物作り、茶話会
社協との関連	助成金、共同にプログラムを作る

二ヶ所のサロンの担い手に行った聞き取り調査を通じて、美野島のサロンは「アソシエーション型」で余暇過しのサロンであり、城浜団地のサロンは住民の健康維持のためという目的型サロンであることがわかった。

調査1で担い手が、高齢者がサロンに参加することで、「サロンは高齢者の交流の場」、「普段会えない方と出会い、世代を超えた交流ができる」という回答が見られたことから、担い手の側でも同じ視点を持ってサロンを運営していることがわかった。

また、生きがいについての質問する時、直接「生きがいはなんですか」と尋ねた際に、反応が薄くぼんやりした回答者が「嬉しいこととか楽しいことはなんですか」と言い換えて質問すると、「家族と一緒にいることです」や「ものづくりです」といった回答を見ることができた。これは、「生きがい」という言葉が回答者の日常生活においては、はっきりと意識されることがなく、質問された場合には意味を把握できず答えに詰まるということが考えられる。鈴木(1986)が指摘するように「生きがい」は平凡なものでありながら、複雑で簡単に特定できないものであるということを確認できた。

4 調査2

調査2では、聞き取りの対象者は美野島サロンの参加者Y氏と城浜団地サロンの参加者N氏の二人である。美野島のY氏には2012の11月、城浜団地のN氏に同じ質問項目を使い2012年の12月に調査を実施し、Y氏は本人の自宅、N氏は城浜団地町内の集会所で行った。調査2で得られた主な知見は主に4つ見る事が出来た。第一の知見は、退職シニアは配偶者との死別後、地域とのつながりが希薄になるという、都市の退職シニアの老後生活を確認できた点である。第二に、サロンに参加することを通じて、それまで、つながりが薄かった地域に「デビュー」することが出来、それによって顔見知りを増やせた点である。第三は、サロンに参加する際に高齢者が自由に活動を選べる自由度が重要である点である。第四点は、高齢者はサロン活動のような社会参加活動を通じて、生きがいを感じられる点である。

今回の調査対象者は子供や配偶者を持っていたため、まず家族が頼りの一番手となり、サロンの知り合いにまでは及ばないという事も考えられる。サロンの知り合いが本当に「軽い付き合い」にとどまっているかどうかを明らかにするためには、一人暮らしの高齢者に聞き取りを行う必要があり、その点に関しては、課題が残っている。

5 知見とまとめ

担い手、参加者と社協の職員に聞き取りを行い、「地域」、「個人（参加者）」、「サロン」という三つのキーワードから分析した。それぞれの図はサロン、参加者それぞれの繋がりや構造を示したものである。地域における行事が多いと地域内のつながりも良好になる事が把握できた。美野島サロンは、趣味・娯楽といった個人性の強いサロンである事が分かった（図7）。

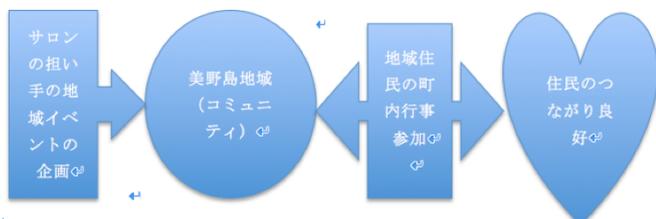


図7 美野島地域

また、城浜団地サロンは住民と担い手と社協が連携し、団地内の課題を解決しようとする自発的な行動から高齢者の福祉健康、見守りを目的とする「健康目的型」サロンが発生したと分かった（図8）。

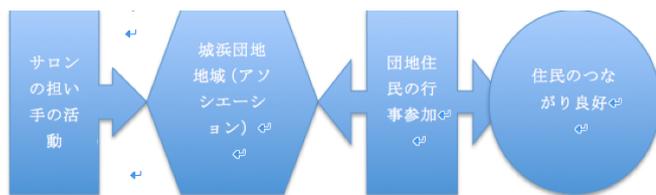


図8 城浜団地地域

参加者Y氏はサロンに参加する事で、縮小された生活範囲における生活が再び多元的なものなり、更にサロンを紹介する行動に繋がりうることも分かった（図9）。

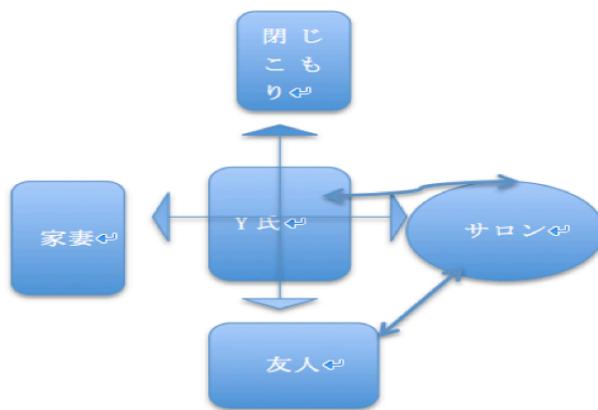


図9 Y氏のつながり構造

N氏は、転居先でのつながりが薄くなる事、構築してきた繋がりを失いかねない事になる際にどのような繋がりをサロンが提供できるかという点についても課題が残った（図10）。

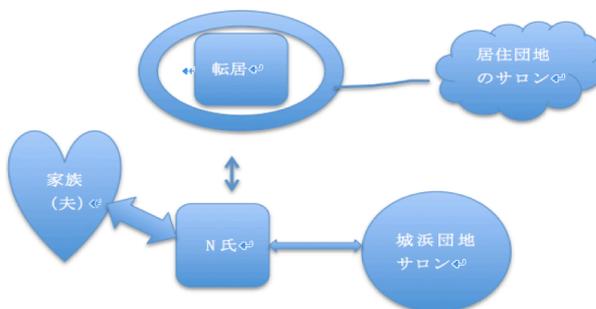


図10 N氏のつながり構造

Y氏のような状況に置かれた際に、N氏のように周辺を取り巻く関係を多元化させる事が可能であるかどうかの問題となる。このような多元化された人間関係が危機に陥った際、どのようにその関係を維持することができるかはN氏のような多くの高齢者が直面する課題ではないかと思われる。

参考文献

福岡市保健福祉局, 2011, 『平成22年度福岡市高齢者実態調査報告書』。
 金子勇, 1993 『都市高齢社会と地域福祉』 ミネルヴァ書房。
 前田信彦, 2006, 『アクティブ・エイジングの社会学——高齢者・仕事・ネットワーク——』 ミネルヴァ書房。
 鈴木広, 1986, 『都市化の研究』 恒星社厚生閣。
 高野和良・坂本俊彦・大倉福恵, 2007, 「高齢者の社会参加と住民組織——ふれあい・いきいきサロン活動に注目して」 『山口県立大学大学院論集』 第8号: 129-137。